防衛大学校本科第３６期及び理工学研究科第２９期学生卒業式における学校長式辞（平成４年３月２２日）

第5代学校長　夏目　晴雄

防衛大学校第３６期学生及び理工学研究科第２９期学生の卒業式を行うに当たり、宮澤内閣総理大臣[注(1)]、櫻内衆議院議長[注(2)]、長田参議院議長[注(3)]、宮下防衛庁長官[注(4)]をはじめ国会議員の諸先生ほか、内外多数の来賓並びに父兄の方々の御臨席を賜りましたことは、卒業生にとりましてはもとより、防衛大学校にとりましても無上の光栄であります。教職員と学生一同に代わり、来賓各位の御厚情と父兄の方々の御熱意に対し、心から御礼申し上げます。

３５８名の本科卒業生諸君、顧みれば昭和６３年春４月、希望と不安との交錯する中、緊張感に胸を震わせながら、ここ小原台の門をくぐった時のあどけなかった諸君の表情を、つい昨日のように思い出します。将来、幹部自衛官として、その生涯を防衛の職務に捧げようという決意も、必ずしも強いものではなかったかも知れません。

それからの４年間、厳しい団体生活の中で勉学や訓練に励み、幾多の苦しいハードルを越え、試練に耐え、一回りも二回りも大きく、逞しく成長いたしました。そして幹部自衛官となるべき決意も揺るぎないものとなりました。今や胸を張って堂々と卒業して行く資格は、諸君のものであります。

タイ王国４名の留学生諸君に対しても、心から祝福を贈るものであります。

さて諸君は、これから陸・海・空それぞれの幹部候補生学校において、

注(1)　宮澤喜一

注(2)　櫻内義雄

注(3)　長田裕二

注(4)　宮下創平

初級幹部としての専門教育を受けるわけでありますが、諸君の幹部自衛官としての修業は、正にこれからが本番であります。プロフェショナルとしての自衛官の道は、決して平坦なものではなく、その舞台は、拍手や喝采とはおよそ無縁のものと覚悟しなければなりません。

私は、諸君にフランスの作家ジャン・ジオノの「木を植えた人」という小さな、美しい物語を贈ります。

ある男が旅をしていた。場所は南フランスのプロバンス地方の高地である。そこは岩のむき出した険しい山が連なり、夏は焼けつくような太陽に、そして冬は冷たい乾いた風にさらされる酷(きび)しい気候風土のため、ほとんど無人の荒野であった。旅人は、耐えがたい程激しい風が吹きまくる中を何時間も水を求めて歩くうち、一人の羊飼いに会い、瓢箪の水を飲ませて貰いその小屋に泊まった。

羊飼いの年は５０才前後、ふだん孤独な生活を続けているせいか口数も少なく物静かであったが、一緒にいるだけで不思議に心が落ちついた。

夜、羊飼いは小さな袋を取り出し、食卓の上にドングリを、ざあっとあけた。それをひとつずつていねいに調べ、よい実をよりわけ百個そろえた。翌朝、彼は、長さ１メートル半くらい、親指ほどの太さの鉄の棒をもって出かけた。めざす場所につくと、鉄の棒を地面につきさして小さな穴を作り、その穴にドングリをひとつ入れ土でふさいだ。つまり、羊飼いは樫の木の種を蒔いていたのである。しかも、一粒ずつ心を込めて毎日１００個。

この出来ごとのあと２度にわたり、大きな戦争があり、男は再び高地を訪れた。驚いたことに、かつて何もなかった丘や谷間に樫だけでなく、ブナもカバも見事に生い茂っていた。そして、一つの創造は思いがけない連鎖反応をおこすという実例であろうか、いつも乾いていた筈の幾筋かの小川には水が流れ、乾いた烈風のかわりに甘い香りの優しい風が吹いていた。きれいな泉もわき出していた。

あの羊飼いは、何十年もの間、毎日毎日木を植えていたのである。

この物語は、本当に世を変え得るものは権力や富ではなく、また、数と力を頼む行動や声高な主張でもなく、静かな持続する意志に支えられた力まず、目立たず、見返りを期待しないねばり強い無私の行為であることを教えています。

国家防衛の任は、あくまで重く、その道は険しく遠いのであります。防衛問題や自衛隊に対する世間の理解や認識も決して十分とはいえませ

ん。逆風に立ち向かい、己への名利、栄達、金銭的利害の如きは二の次ぎとして、祖国への献身、国民への奉仕を内心の喜びとし、生き甲斐とする自衛官の本分も、この「木を植える人」と異なるところはないのであります。

ダンテの神曲に「汝の道を歩め、而して人の語るにまかせよ」という言葉があります。他人が何をいおうと自らを信じ、まっすぐ前を見据えて、新しい時代の防衛を築くための道を邁進して貰いたいと思います。

次に、理工学研究科６５名の卒業生諸君に対し、一言申し述べます。

諸君は理工学に関する大学院レベルの専門的知識を修得すべく、２年間にわたって頭脳の充電を図り、将来への飛躍のポテンシャルを培う貴重な研究体験を積まれたのであります。

今後諸君は、それぞれ新たな任務につかれるわけでありますが、更に研鑽精進を重ね、今後ますます重要性を増すであろう自衛隊の科学技術の発展向上に尽力されるよう切望してやみません。

ともあれ、諸君の小原台生活は、今まさに「夢の如く」その幕を閉じようとしております。これから先、同期生同士、友情と団結を更に強め、いかなる部署、いかなる境涯にあっても互いに手を取り合い、助け合いつつ、祖国日本の輝かしい将来のために挺身してゆかれんことを心から祈念しつつ、ここに式辞を終わるものであります。